D-4　『リグ・ヴェーダ』の韻律における印欧祖語の喉音の反映と方言差

塚越柚季

1　はじめに

印欧祖語に再建される子音音素である喉音 *H (*h_1, *h_2, *h_3)[*1] はアナトリア語派以外の印欧語で本来の音価を消失した。しかしながら、インド・アーリア語派最古の言語であるヴェーダのサンスクリットでは、讃歌集『リグ・ヴェーダ』の韻律に喉音の残存の痕跡があったことが指摘されてきた。中でも Gippert (1997) は『リグ・ヴェーダ』の韻律が現行のテキストで不規則になっている箇所に喉音の残存を想定することで、韻律が復元されると提案した。この説は広く受け入れられたが、ある語について喉音の残存を想定した場合、同じ語が別の箇所では喉音を消失したと考えなければ韻律が復元できないという、一貫性を欠く語が存在する問題は残されてきた。本研究では『リグ・ヴェーダ』の詩人間の方言差という観点から、一貫性を欠く語について喉音の残存の有無と作者である詩人に連関があるかを検討した。

2　印欧祖語からサンスクリットまでにおける喉音

印欧祖語には子音音素として喉音 *H (*h_1, *h_2, *h_3) が再建される。これはアナトリア語派以外において消失した。喉音が存在した痕跡は、サンスクリットをはじめ多くの言語で見られる。ただし、これは喉音の存在ゆえにその周囲に起きた音変化の結果が見えるだけで、喉音そのものは音素としては残っていない。

サンスクリットでは喉音は消失しているものの、サンスクリットより古いインド・イラン祖語では喉音 *H が再建される。インド・イラン祖語において、印欧祖語の *o を核とする音節が閉音節のとき *a になるが、開音節のときは *aː になるという Brugmann の法則がある。能動の完了 1 人称単数語尾の喉音による閉音節化によって Brugmann の法則が阻害されることが確かめられる (Kuryłowicz 1927)。例として、kar < *k^wor 「作る」の完了形を見ると、能動 1 人称単数が cakára < *k^we.k^wór.h_2e、能動 3 人称単数が cakā́ra < *k^we.k^wó.re である [*2]。

印欧祖語では 3 つあるとされる喉音だが、どの段階でそれぞれの喉音が合流したかには議論がある。例えば、*h_2 は他の喉音と異なり独自のふるまいをすることが知られ、遅くまで他の喉音とは合流していなかった可能性が指摘されている (Gippert 1994)。そうであっても、喉音の消失後には韻律構造に影響を及ぼさないと考えられてきた。

3　連声

サンスクリットには、文中において特定の音環境で隣接した語の隣接部が変化するという連声規則がある。隣接部が結合して隣接した語が結合する場合 (例: -a a- > -ā-) と隣接部の音が変化する場合 (例: -i a- > -y a-) とがある。例に示したほか、隣接部の音の組み合わせごとに多くの連声規則が存在する。この変化した形はテキストにもそのまま反映される。

連声と詩の韻律の関係について、例えば、Beguš (2015) は、サンスクリットの u から始まる語の中で印欧祖語で *u̯ から始まる語は、韻律上、vu と読めると提案した。このように、語頭の音が想定されるものと

---

*1 どの種類の喉音か分からないものの、いずれかの喉音であると考えられる場合や、どの喉音であるかは問わない場合は、*H と表記する。

*2 サンスクリットの表記と IPA の対応は以下の通り。
マクロン付きの母音は長母音: ā = [aː], ī = [iː] など。下に丸付きは母音: r̥ = [r̩], l̥ = [l̩]。下に点付きの子音は反舌音: ṭ = [ʈ], ḍ = [ɖ] など。その他: ṅ = [ŋ], ñ = [ɲ], j = [ɟ], y = [j], ś = [ɕ], h = [ɦ], ḥ = [h]。

異なることによって、文中における語の隣接部の音環境が変わり、連声も違ってくる。実際、Beguš はこのようにして本来の形に戻すことで『リグ・ヴェーダ』(後述) の韻律の復元をおこなった。

4　『リグ・ヴェーダ』の構成

『リグ・ヴェーダ』は全巻を詩人 1 人が作ったのではなく、いくつかの家系の詩人らが作ったとされ、家系を中心として巻が編纂されている。特に 2〜7 巻は家集として 1 つの詩人家系の詩から成る。それぞれ Gr̥tsamada (2 巻), Viśvāmitra (3 巻), Vāmadēva (4 巻), Atri (5 巻), B^{h}aradvāja (6 巻), Vasiṣṭha (7 巻) が第一世代となる家系の巻である。

また、各巻、各詩節の成立年代も異なる。2〜7 巻の家集は全 10 巻の中でも古く、一方で 1, 10 巻は新しい部類に入り、10 巻がより新しい。文中の語の隣接部の音が変化するという連声規則の違いや、詩節を作った詩人の代などから年代が推測される。9 巻は、各詩人の詩節の内、ソーマ・パヴァマーナ (精製されるソーマ) を扱った詩節を集めたものであり、8 巻は Kaṇva と Aṅgiras の家系を中心に集められているが 2〜7 巻の家集よりは新しい (Oldenberg 1888:249ff)。さらに家系内の世代差もあるため、同一の巻であっても、古い世代が作った詩節と新しい年代が作った詩節が混ざっており、巻の中でも年代が異なる。

『リグ・ヴェーダ』は現在のアフガニスタンからインド北部の広い地域で成立したため、年代差に加えて方言差も認められる (Witzel 1989)。表 1は Witzel (1995: 211, 214) を参考に作成した一部の詩人家系とその地域である。Witzel は詩の中に出てくる地名から詩人とその地域を推測した。西/北西はインド亜大陸の西から北西にかけての地域をさす。地域がかぶるところもあるが、Gr̥tsamada, Vāmadēva 以外は他の地域にもともといたか他の地域へと移動していることが見て分かる。

表1　家集の詩人とその地域

巻	詩人	地域
2	Gr̥tsamada	西/北西、パンジャーブ
3	Viśvāmitra	パンジャーブ、サラスヴァティー川
4	Vāmadēva	西/北西、パンジャーブ
5	Atri	西/北西、パンジャーブ → ヤムナー川
6	B^{h}aradvāja	西/北西、パンジャーブ、サラスヴァティー川 → ガンガー川
7	Vasiṣṭha	サラスヴァティー川、(シンドゥ川/パンジャーブ → ヤムナー川)

5　韻律について

5.1　『リグ・ヴェーダ』の韻律

ヴェーダ文献の中でも最古の『リグ・ヴェーダ』は韻律詩であり、特に各行の後半部分 (カデンツ) の韻律が極めて規則的に現れる。多くは 1 行が 8, 11, 12 音節のいずれかであり、カデンツとは 8, 11 音節詩は後ろ 4 音節、12 音節詩は後ろ 5 音節の部分をさす。8 音節詩のカデンツは通常、軽重のイアンボス ◡ — ◡ ⏑̆[*3] で、11 音節詩は重軽のトロカイオス — ◡ — ⏑̆、12 音節詩はトロカイオス ＋1 音節 — ◡ — ◡ ⏑̆ となる。

元の詩は数百年間、口頭で伝承された後、編者 Śākalya によって固定された。そのため、その時代の連声規則や語の読み替えなどにより想定される韻律から逸脱している場合がある。

[*3] ◡ で軽音節、— で重音節を表し、⏑̆ はどちらでもよいことを示す。

韻律は通常規則的であると考えられる。このことから、韻律の乱れた行も比較再建した語形に修正することで、想定される韻律が復元される可能性がある。例えば、1 行の音節数が上記の想定される音節数に満たないとき、半母音 y, v をそれぞれ母音 i, u と読むことで韻律を復元できる場合がある (1)。また、語の読み替えの例として、pāvaká- 「輝く」は出現箇所全てにおいて pavāká- と読み替えることで韻律復元が可能である (2)。

(1) 半母音 tis.ráḥ. pra.jā́. ā́r.yā. jyó̄.ti.rag.rā́ḥ — — ◡ — — — | — ◡ — —

半母音 → 母音 tis.ráḥ. pra.jā́. ā́.ri.ā. jyó̄.ti.rag.rā́ḥ — — ◡ — — ◡ — | — ◡ — —

(7.33.7b[*4]: 11 音節、トロカイオス[*5])

(2) 読み替え前 sa.mud.rā́r.t^{h}ā. yā́ḥ. śú.ca.yaḥ. pā.va.kā́s ◡ — — — — ◡ ◡ | — — ◡ —

読み替え後 sa.mud.rā́r.t^{h}ā. yā́ḥ. śú.ca.yaḥ. pa.vā.kā́s ◡ — — — — ◡ ◡ | — ◡ — —

(7.49.2c: 11 音節、トロカイオス)

5.2 喉音の残存を仮定した韻律復元法

不規則な韻律を示す箇所の復元方法の一つとして Gippert (1997) は、喉音が『リグ・ヴェーダ』の時代には残存し、これを補うことで韻律の復元ができると提案した。

Gippert の提案した喉音の残存を仮定した復元方法を次に示す。サンスクリットでは、重音節は音節核の母音が長母音か二重母音である音節、または尾子音を持つ音節であり、軽音節は音節核の母音が短母音であり尾子音を持たない音節である。du.hi.tár- 「娘」の第 1 音節は軽音節だが『リグ・ヴェーダ』では duh.i.tár- として第 1 音節が重音節と分析される (音節境界は . で表す)。印欧祖語形は *d^{h}ugh$_2$tér- である。この祖語形の喉音 *h$_2$ が直前の *g と子音連続を作る。その音節構造が維持されて、h (<*j^{h} < *g)[*6] が第 1 音節の尾子音となるため、第 1 音節 duh は重音節と韻読される。

6 本題

6.1 一貫性のない語の問題

Gippert (1997) は不規則な韻律を持つ行に対して喉音に基づく韻律の復元を行った。しかし、その韻律を修正された語が他の部分でどのような韻律になるかについては言及しなかった。筆者の調査によれば、次に例示するように、ある語に対して喉音を補うことで韻律の復元が可能な場合と、逆に喉音を補ってはいけない場合とが確認される。

vásu- < *h$_1$u̯ésu-[*7]「良い」を語基にもつ vásus 「良い. 主格単数」, vásiṣṭhas 「最も良い/Vasiṣṭha(詩人名). 主格単数」, vásiṣṭhaːn 「最も良い/Vasiṣṭha(詩人名). 対格複数」が現れる全ての行は印欧祖語の喉音 *h$_1$ が残存していたとして韻律を復元できる (3)。印欧祖語で 3 種ある喉音 *h$_1$, *h$_2$, *h$_3$ だが、ここでは『リグ・ヴェーダ』で残っていたと想定される喉音をまとめて H と表記する。韻律に影響を及ぼさない喉音は残存していたか不明なため文中には表記せず、韻律に影響を及ぼす喉音のみ表記する。

(3) 喉音なし mā́. ri.ṣaṇ.yō. va.sa.vā.na. vá.suḥ. sán — ◡ — — ◡ ◡ — | ◡ ◡ — —

喉音あり mā́. ri.ṣaṇ.yō. va.sa.vā.na H.vá.suḥ. sán

---

*4 『リグ・ヴェーダ』7 巻、33 番目の詩節、7 番目の詩連の 2 行目をさす。以下同様。

*5 想定される 1 行の音節数および、カデンツ (| 以降) の韻律 (トロカイオスまたはイアンボス)。

*6 インド・イラン祖語において、*g は *h$_2$ によって気息音化 (*g > *j^{h}) し、サンスクリットで非口腔音化 (*j^{h} > h) した。

*7 祖語形はすべて Mayrhofer (1992, 1996) を参照した。

— ◡ — — ◡ ◡ — ｜ — ◡ — —

(10.22.15b: 11 音節、トロカイオス)

一方で、同じ語幹 *h_1u̯ésu- から派生した vásvas 「良い. 属格単数」, vásyas 「より良い. 対格単数」, vásyasi: 「より良い. 女性単数主格」は喉音が消失したとしないと不規則な韻律を持つことになる (4)。

(4) 喉音なし rā.yṓ. vi.b^{h}ak.tā́. sam.b^{h}a.rā́ś. ca. vás.vaḥ — — ◡ — — — ◡ ｜ — ◡ — —

喉音あり rā.yṓ. vi.b^{h}ak.tā́. sam.b^{h}a.rā́ś. ca H.vás.vaḥ — — ◡ — — — ◡ ｜ — — — —

(4.17.11d: 11 音節、トロカイオス)

そこで、このような語ごとの喉音の韻律への影響の有無に詩人・時代ごとの言語の違いが反映されているという仮説を立て、該当箇所を再検討した。

6.2 語と詩人の関係の検証方法

検証の方法として、カデンツの音節の軽重が想定される通りであるかを基本にした。加えて、語頭が母音である場合には、次の 3 箇所も考慮した。[1] 連声による母音の結合がある箇所、[2] 語末の長母音 ē, ō に、語頭の母音が続く箇所、[3] 半母音 y, v に母音が続く箇所。[1] は、語の境界部で同種の母音が連続するとき、それらが結合して対応する長母音になる (-a a- > -ā- など) という連声が起こる箇所であり、[2] は、語の境界部で ē, ō と母音が連続するとき ē, ō は短母音 e, o になるという連声が起こる箇所である。[3] は、5.1 節の (1) のように半母音を母音として分析する可能性がある箇所である。しかし語頭に喉音が存在した場合、隣接部の音環境が変わりこれらの連声を起こさなくなると考えられるため、この点も検証の中に入れた。ただし、[3] に関しては Sievers の法則[*8]のように喉音に関係なく、半母音を母音として読む場合があることから、表 4でのみ考慮した。

『リグ・ヴェーダ』のテキストは Martínez García and Gippert (1995) のデジタルテキストを用いた。詩節を作成した詩人の名前は Macdonell (1886) を参照した。

検証は 53 の語根 (語彙素) から作られる 289 の語幹を対象とした。簡単のため、喉音の種類に偏りが生じるが、喉音の残存が最も期待される *h_2 を語頭に持つ語形を主に調べた。

6.3 検証結果

6.3.1 喉音残存と詩人の関係

ある詩人が、特定の語幹から形成される全ての語形に対して一貫して喉音を保持していたことが確認される。表 2 に語幹 arā- ← *$h_2$er- 「(車輪の) スポーク」の場合を示す。この中で、Atri 家系の Gaya (5 巻) と Vasiṣṭha (7 巻) とが語幹 arā- に対して、音節の軽重および連声 [1], [2] に関して喉音の残存を示す。それでも中には、一貫しない語の存在は確認される。例えば、上記の詩人 Vasiṣṭha と語幹 uṣás- の組み合わせの中で、1 箇所 (7.80.3a) だけ喉音が消失していると考えられる詩が存在する。

この表に関してさらに 1 つ問題が残る。喉音が消失するという変化を考えると、古い世代においては喉音が残存して、新しい世代においては喉音が消失したということが予想される。ここではその予想に反して、家系の第一世代である Atri は喉音を残さない一方で、それより新しい世代の Gaya が同一の語幹に対して喉音を残す。和歌における「本歌取り」のような、他の詩節からの詩の引用は『リグ・ヴェーダ』中でよく見られるが、Gaya が作った該当の詩 (5.9.3b) は『リグ・ヴェーダ』内で唯一の詩である。

[*8] 重音節の後で母音の前の y, v は i, u である。

表2　詩人と ára の喉音の有無

詩人	語幹	祖語形	喉音有無	巻
Atri	arā́-	*$h_2$er/l	なし	5
Gaya (Atri 家系)	arā́-	*$h_2$er/l	あり ([1])	5
Bud^{h}a (Sōma 家系)	arā́-	*$h_2$er/l	なし	10
B^{h}ūtāṃśa (Kaśapa 家系)	arā́-	*$h_2$er/l	なし	10
Vasiṣṭha	arā́-	*$h_2$er/l	あり	7
Vasiṣṭha	arā́-	*$h_2$er/l	あり ([1])	7
Vasiṣṭha	arā́-	*$h_2$er/l	あり ([2])	7
Vāmadēva	arā́-	*$h_2$er/l	なし	4

6.3.2　詩人に依らない喉音の残存

一方で、喉音の残存により韻律復元が可能であるかを確認した語の中には、詩人に依らず喉音が残存すると考えられる語も存在する (表 3)。この他、yúvan- < *h_2i̯éu̯-Hon-/*h_2i̯u-Hén-「若い」や ay-/i- < *(h_1)ei̯-/(h_1)i-「この [近称]」を語幹とする代名詞 (i-d-ám など)・i-há なども多くの詩人の詩節の韻律から喉音の残存が認められる。ay-/i-は、a- < *(h_1)e- と補充によって近称の指示代名詞のパラダイムを成すが、a- < *(h_1)e- は全て喉音が消失した。このように語根、語幹ごとに喉音の有無が確認され、ヴェーダ期には詩人に依らず喉音が残る場合がある。

表3　詩人に依らず喉音が残存する語 ṛ̥tá-「正しい; 天理」

詩人	語幹	祖語形	喉音有無	巻
Agastya	ṛ̥tá-	*h_2ṛ̥to-	あり	1
Kuśika または Viśvāmitra	ṛ̥tá-	*h_2ṛ̥to-	あり	3
Dīrg^{h}atamas (Aṅgiras 家系)	ṛ̥tá-	*h_2ṛ̥to-	あり	1
B^{h}aradvāja	ṛ̥tá-	*h_2ṛ̥to-	あり	6
Vasiṣṭha	ṛ̥tá-	*h_2ṛ̥to-	あり	7
Vāmadēva	ṛ̥tá-	*h_2ṛ̥to-	あり	4

6.3.3　家集の詩人ごとの喉音残存有無

2～7 巻の家集の詩人ごとの喉音の残存が確かめられる詩の数と喉音が消失したと考えられる詩の数を表 4に示す。かっこ内の数値は、[3] の考慮も含んだ値であり、喉音の残存が確実ではないがその可能性があるような箇所を含んだ値である。B^{h}aradvāja, Vasiṣṭha, Vāmadēva らの詩節では喉音が残存している場合が多い。一方 Atri, Gṛ̥tsamada, Viśvāmitra らの詩節では確かな喉音の残存が認められないように見える。

ここで、7 巻の詩人 Vasiṣṭha に焦点を当てる。Vasiṣṭha の詩節の中では、特定の語幹に対して常に喉音を持つ語がいくつか確認される。id^h < *$h_2$ei̯d^h「火を灯す」は Vasiṣṭha の詩節、さらに Gṛ̥tsamada の詩節の中では常に喉音が残存する。また yúvan- < *h_2i̯éu̯-Hon-/*h_2i̯u-Hén- も Vasiṣṭha の詩節中で同様である。動詞 ay < *$h_1$ei̯「行く」の分詞 iyā́na- は、この語幹においてのみ喉音の残存がある。しかし、ay の各活用形では喉音が消失している。このように一部、同じ詩人で語根 (語彙素) が同じであっても語幹が異なるな

表4　家集の詩人ごとの喉音残存数

詩人	喉音残存数	喉音消失数	巻
Atri	0 (0)	4	5
Gr̥tsamada	0 (4)	6	2
B^{h}aradvāja	2 (4)	7	6
Vasiṣṭha	3 (8)	7	7
Vāmadēva	2 (5)	11	4
Viśvāmitra	0 (2)	3	3

らば、一貫してその語根の喉音を残すとは限らない。

7　まとめ

B^{h}aradvāja, Vasiṣṭha, Vāmadēva は喉音を残し、Atri, Gr̥tsamada, Viśvāmitra は喉音を残さないという一般的な傾向が明らかになった。しかし地理を考えると Vasiṣṭha 以外は範囲が広く重複している。喉音の残存の有無は地理的な要因というよりも詩人家系によるものが大きいと推測できる。ただし、問題として Atri 家系のような家系の世代の前後と喉音の残存・消失が期待される対応をしないということがある。詩節を作成した詩人は、Kātyāyana の Sarvānukramaṇī (Macdonell 1886) を参照したが、『リグ・ヴェーダ』が編者によって固定された時代よりもさらに後の時代につくられたため、そもそも詩人の情報の正確性についても議論の余地がある。

また、リグ・ヴェーダの時代では詩人により喉音 *H の残存の有無が異なるが、カデンツの韻律は喉音の有無にかかわらずどの詩人によっても維持されたという、方言的変種を超えたリズムの堅牢性も明らかになった。

参考文献

Beguš, Gašper (2015) A new rule in Vedic metrics. In: *Journal of the American Oriental society.* 135: 541-550.

Gippert, Jost (1994) Zur Phonetik der Laryngale. In: Jens E. Rasmussen (ed.) *In honorem Holger Pedersen.* 455–466. Wiesbaden: Reichert.

Gippert, Jost (1997) Laryngeals and Vedic metre. In: Alexander Lubotsky (ed.) *Sound law and analogy.* 63-79. Amsterdam: Rodopi.

Kuryłowicz, Jerzy (1927) Les effets du ə en indoiranien. In: *Prace Filologiczne.* 11: 201-243.

Macdonell, Arthur Anthony (1886) *Kâtyâyana's Sarvânukramanî of the Rigveda: with extracts from Shadgurusishya's commentary entitled Vedârthadîpikâ.* Oxford: Clarendon Press.

Martínez García, Francisco Javier and Jost Gippert (1995) Thesaurus Indogermanischer Text- und Sprachmaterialien. `http://titus.fkidg1.uni-frankfurt.de/private/texte/indica/vedica/rv/pp/rvarpp.txt` [2018 年 8 月アクセス].

Mayrhofer, Manfred (1992, 1996) *Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen I Band, II Band.* Heidelberg: Carl Winter Universitätsverlag.

Oldenberg, Hermann (1888) *Metrische und textgeschichtliche Prolegomena.* Berlin: Verlag von Wilhelm Hertz.

Witzel, Michael (1989) Tracing the Vedic dialects. In: Calette Caillat (ed.) *Dialects dans les litteratures indo-aryennes. Actes du Colloque International organise par UA 1058 sous les auspices du C.N.R.S.* 97-264. Paris: College de France.

Witzel, Michael (1995) Ṛgvedic history: poets, chieftains and politics. In: George Erdosy (ed.) *The Indo-Aryans of ancient South Asia: language, material culture and ethnicity.* 307-352. Berlin/New York: de Gruyter.